

ミャンマー・シャン州におけるシャン語定期刊行物

菊池泰平

大阪大学大学院

シャン語は、ミャンマー東部～東北部を中心に話されているタイ系言語である。国際 SIL が発行する『エスノログ』は、その母語話者を約 330 万人と推計している（公教育の現場でシャン語が正式な科目として教えられる場面は限られているため、シャン文字の識字者はこれよりも少ないはずである）。ミャンマー以外にも、中国雲南省やタイ西北部にも母語話者がいるが、本稿では主にミャンマー国内で発行されている雑誌やニュースに限定して紹介してみたい¹。

古いものでは、『ラングーン大学青年マガジン』、『ヨーコン』、『シャン州文化』、『シヤンの声』、『独立』、『ブンフパテサ』、『レンカムレン』、『展望』がある。ただし、これらに関して、すべての現物を筆者が確認できている訳ではないことを予め断っておく。

1. 『ラングーン大学青年マガジン (S: ဗိုလ်လိက် တံဆိပ်, / E: Tai Youth Magazine / B: တိုင်းလူငယ်စာစောင်)』

ヤンゴン大学シャン文芸協会によって発行された。ヤンゴン大学に関連する情報、一般ニュース、短編小説、コミック、シャン文化に関する記事、詩などを掲載している。Online Burma/Myanmar Library で 1958 年発行の第 4 号 ([シャン語](#)、[英語](#)、[ビルマ語](#)) を確認できる。編集員の集合写真には、著名なシャン史家サイアウントゥン (1932-2022) 氏の若き日の姿も確認できる。

2. 『ヨーコン (S: ယွတ်ခွင် / E: Yord Kong Journal)』

1970 年に、シャン州で出版された。一般常識、マンガ、詩などを掲載している。Online Burma/Myanmar Library で [第 6 号 \(1994 年\)](#) を確認できる。

3. 『シャン州文化 (S: ပပ်ယိဝ်ဇော်တံး / B: သျမ်းယဉ်ကျေးမှုအကြောင်း)』

1970 年、シャン州タウンジーで出版された。発行元は、ビルマ政府シャン州文化部であった。Online Burma/Myanmar Library で [1970 年版](#)、[73 年版](#)、[76 年版](#) を確認できる。

¹ 本稿では詳しく紹介できないが、現在、シャン州でビルマ語による情報発信しているメディアに、『カンボーザ・タイ・ニュースジャーナル (ကမ္ဘောဇတိုင်း သတင်းဂျာနယ်)』、『タチレクニュースエージェンシー (Tachiliek News Agency)』、『人民の声 (The People's Voice)』などがある。

4. 『シャンの声 (S: သီငံတံး)』

シャンに関するニュース、詩、漫画、宗教、政治などを掲載している。Online Burma/Myanmar Library で第7号 (1983年) を確認できる。

5. 『独立 (S: ဂွမ်းခေၤ / E: Freedom's Way)』

1984年に創刊された。シャン州の情勢、シャン文化やシャンの人々、政治などを伝える。Online Burma/Myanmar Library で[第1号 \(1984年1月\)](#)、[第2号 \(1984年6月\)](#)、[第5号 \(1988年10月\)](#)を確認できる。本誌は、Shan Herald Agency for News (SHAN) の前身にあたる。

SHANは、民間非営利のマルチメディアとして、1991年にシャン州で結成された組織である。もともとタイ＝ミャンマー国境沿いで運営されていたが、紛争から逃れるため、1996年にチェンマイへ移転した。2013年にミャンマー政府へ出版登録を行ない、再びシャン州の州都タウンジーに拠点を置いた [Piper and McElhone (ed). 2018: 50]。

シャン州内外の政治・社会・経済の発展に関する情報を提供し、人権や、民主主義、連邦主義、少数民族の権利に加えて、シャンの文化・歴史・言語的な遺産に関する理解促進を促すことをミッションとして掲げている。

6. 『ブンフパテサ (S: ပုံဆံ့ ဂျူ ဝတေ,သၢ်)』

1986年にヤンゴンで創刊された。主な内容は、シャンの歴史、シャン語、シャン化、健康問題、漫画、詩などである。Online Burma/Myanmar Library で[1986年1月](#)と、[1990年5月](#)分を確認できる。

7. 『レンカムレン (S: လိင်ခမ်းလိင်)』

1994年に創刊された。シャン州に関する一般記事や、上座仏教の研究教育に焦点を当てた記事を掲載している。京都大学東南アジア地域研究研究所図書室に一部所蔵がある。

8. 『展望 (S: ပံးဂွမ်း / E: Outlook)』

発行開始年は不明だが、出版者と頒布者はともに SHAN である。一般常識、シャン族の歴史、シャン族の文化、短編小説などを掲載した雑誌である。Online Burma/Myanmar Library で[第3号 \(1995年\)](#)を確認できる。

近年発行されたものでは、『SHAN マガジン』、『多様性』、『山脈の声』、『タイ・フリーダム』、『シャン文芸文化協会 67 周年記念誌』、『サイツァイタイ』がある。近年の特徴としては、新聞やジャーナルの一部またはすべての機能が、ニュースサイト・ビデオ・ラジオの形式で、オンラインへ移行していることが挙げられよう。

9. 『SHAN マガジン (S: ဟူးတွံဂူဂ်; /E: The SHAN Magazine / B: သျှမ်းသံတော်ဆင့်)』

前述の SHAN が発行する月刊誌である。『SHAN マガジン』は、シャン語・ビルマ語・英語の三言語によって記されており、その内容は政治、社会、文化など多岐にわたる。一部は、京都大学東南アジア地域研究研究所図書室に[収蔵](#)されている。

SHAN は現在、ウェブサイト ([シャン語](#)、[英語](#)、[ビルマ語](#))、Facebook ([シャン語](#)、[英語](#)、[ビルマ語](#))、YouTube ([シャン語](#))、ウェブラジオ ([シャン語](#))、Twitter ([ビルマ語](#)) による情報発信をメインに展開している。ウェブサイト、YouTube、ウェブラジオの情報は、Google Play や AppStore で配信されているアプリケーションでも閲覧可能である。

現在、SHAN の収入源は、雑誌収益、広告料、および寄付である。国内外のメディアに対して、ビデオやオーディオコンテンツの販売も行っている。近年は、特にビデオコンテンツの制作に力を注いでおり、シャン語を解さない人々にも配慮して、シャン語による配信にビルマ語字幕を付けるなどの工夫も見られる [Piper and McElhone (ed). 2018: 51]。

10. 『多様性 (S: သိမ်ပျံး)』

2013 年に創刊された新聞で、シャン州に関するニュース、国際ニュース（通信社からの買取記事の翻訳を含む）、旅行、健康、教育、ビジネス、エンターテインメントなどの記事が掲載されている。

もともとは、2002 年に国家平和発展評議会 (State Peace and Development Council) 体制の下、非公式に創刊されたシャン語ジャーナルである。当初は月間で、一か月あたり、2000 から 3000 部程度を発行していた。当時、政党登録された団体には定期刊行物を発行する権限が与えられていたため、シャン諸民族民主連盟 (Shan Nationalities League for Democracy) を通じて出版ライセンスの申請を行ったが、不許可となっている。その後、『サイペン (သိပ်ပျံး)』という小雑誌の発行も 2004 年に開始した [Soe Lynn Htwe 2017: 51-52]。

民政移管が始まった 2011 年に、『多様性』は隔週（月曜日または金曜日発行）のシャン語定期刊行物として出版ライセンスを再び申請した。その結果出版申請は認められて、2013 年 8 月からの出版分を第 1 号として、新たな発行が始まった。2014 年末時点で、『多様性』の発行部数は 9000 部であり、シャン州の北部、南部、東部と、カチン州の一部地域、ヤンゴン、マンダレー、隣国タイでシャン人移民の多いチェンマイで流通している。『多様性』は、ヤンゴンとシャン州に拠点を置くが、記者の雇用形態はフリーランスに近く、さらにボランティア記者に依存している部分も大きい [Soe Lynn Htwe 2017: 53]。

『多様性』の主な目標は、シャン語やシャン文学の保存・促進である。加えて、シャンの人々に政治や時事問題を伝えることや、シャン・ナショナリストたちの

要求を理解してもらうことも目標としている。これを踏まえて、『多様性』はシャン語のみでの発信を行っている。しかし、同紙で使われるシャン語が理解しにくいという指摘が、チェンマイやシャン州南部のパンロンの人々からは挙がっている²。この理由についてソリントウエは、地方ごとの方言差が大きいことに加え、寺院で仏典翻訳を通じてシャン語の研究を行う僧侶たちのような伝統派と、英単語などを意識せずにそのままシャン文字で転写しようとする『多様性』のような革新派の間に、新語を創造する際に現れる立場の違いがあることも示唆している [Soe Lynn Htwe 2017: 54]。

『多様性』は独立採算制をとっており、新聞売上、広告収益、地元から寄付、シャン・コミュニティからの出資金などを主たる資金源としている。広告収益は約5%であり、ビルマ語雑誌に比べるとその比重は、決して大きくない。特に500ほどの出資者の中には、前述のSNLDや、シャン民族民主党(SNDP)、ビジネスマン、NGO関係者たちがいる。一部当たりの制作原価が300チャットで、小売業者に450チャットで販売している。また、市場では卸売業者が500チャットから700チャットで販売している。現在、『多様性』の有力な競合相手は、シャン州軍(北部)の発行する『山岳民の声』と、SHANの発行する定期刊行物である。これらは共に月刊で、ビルマ語とシャン語の二言語による情報発信を行っている。

いずれにせよ、シャン州の週刊新聞としては、現在でもトップクラスの発行部数を誇る。ジャーナルの他にも、独自のウェブサイト³や [Facebook](#) ページ、[YouTube](#) を運営している [Soe Lynn Htwe 2017: 55]

11. 『山脈の声 (S: သီငယ်လုံ / E: Voice of Hsan Loi)』

2014年1月に発行を開始したシャン語とビルマ語のバイリンガル紙である。発行者は、シャン州復興評議会とシャン州軍の情報部(RCSS/SSA)である⁴。 [Facebook](#) と [YouTube](#) を運営している。

12. 『タイ・フリーダム (S: တီးလွတ်လိပ် / E: Tai Freedom)』

シャン州復興評議会とシャン州軍の情報部(RCSS/SSA)によって運営されるウェブサイト ([シャン語](#)、[英語](#)、[ビルマ語](#)) である。シャン州に関する一般のニュースを報じたり、シャン州復興評議会/シャン州軍からの声明や活動を伝える役目を持つ。特に、シャン州で生じた、武装集団による人権侵害に関連する内容を報道している。 [Facebook](#) ページ ([シャン語](#)、[英語](#)、[ビルマ語](#)) や [YouTube](#) ([シャン語](#)) でも、コンテンツ配信を行っている。スマートフォン用のアプリケーション

² シャン語には、センウィ地方を中心に用いられる北部方言と、モンナイ地方を中心に用いられる南部方言があり、後者は北部タイの一部にも及んでいる [柴田 1993: 203]。

³ <https://www.facebook.com/HsaipenMagazine/> (2023年7月13日現在閉鎖)

⁴ <https://www.bnionline.net/en/shan-herald-agency-for-news/item/16747-voice-of-hsan-loi-shans-latest-rival.html>

も存在あるが、日本国内からはダウンロードできない。

13. 『シャン文芸文化協会 67 周年記念誌 (S: ရှေးလိက်လေးလေးနှင့်ငွေတံ၊ ဝင်းတူနှင့်တီး။ မိဂ်ဂလိမ်း 67ပိတိမ်)』

本誌は、2018年にタウンジーのシャン文芸文化協会が発行した記念誌である。シャン語、英語、ビルマ語でそれぞれセクションが分けられている。シャンの文化や文芸に関する内容を掲載している。

14. 『サイツァイタイ (S: နှိမ်လိက် သိလုံတံး / E: Hsai Jai Tai Shan Magazine)』

2019年、ヤンゴンのシャン文芸文化協会が発行した記念雑誌である。管見の限り、全一卷である。シャン族とその言語、文化、芸術、歴史に焦点を当てた物語や、エッセイ、詩、ノンフィクションを掲載している。シャン語、ビルマ語、英語でそれぞれセクションが分けられている。京都大学東南アジア地域研究研究所図書室に[収蔵](#)されている。

このように、紙とウェブの媒体で共通するのは、シャン語による情報発信が、ビルマ語、英語、シャン語といった複数言語で行われる傾向にあることだ。これは、シャン・コミュニティ出身であっても、必ずしもシャン語の読み書きに通じている訳ではない、というシャン語を取り巻く環境を強く反映している。

『多様性』の事例から分かるように、シャン語は方言の差が大きく、公的機関によることばの統一事業は行われていない。さらに、現在、ミャンマーで公教育は、基本的にビルマ語で教授されている。家庭内では話し言葉としてシャン語を使っているが、学校ではビルマ語の読み書きしか学習しないため、シャン語の読み書きに関して苦手意識を持つ者は多い。さらなる教育機会を求める者たちは、ヤンゴンやマンダレーといった都市部、あるいは海外に機会を見出すため、ビルマ語や英語の学習が優先されてしまう。こうした言語面でのディアスポラ的な状況を前にして、自らのアイデンティティを繋ぎとめようとするのが、「シャン」という表象の下で多言語出版を行う定期刊行物なのではないか。

〈参考文献〉

Eberhard, David M.; Simons, Gary F.; Fennig, Charles D. (ed). 2022. *Ethnologue: languages of Asia*. Dallas: SIL International.

Soe Lynn Htwe. 2017. *The Role of Ethnic Media in the “New Myanmar.”* Chiang Mai: Regional Centre for Social Science and Sustainable Development (RCSD), Chiang Mai University.

柴田紀男. 1993. 「タイ諸語」『言語学大辞典第5巻 補遺・言語名索引編』 東京: 三省

堂.

Piper, Tessa; McElhone, Jane Madlyn (ed). 2018. *An Unfavorable Business; Running Local Media in Myanmar's Ethnic States and Regions*. New York: Media Development Investment Fund.